

京都市農林行政基本方針
検討委員会

第2回摘録

平成21年8月31日

日 時	平成21年8月31日（月曜日） 開会 午後1時30分 閉会 午後4時40分
場 所	京都市花き地方卸売市場 大会議室
出席者	【委員】宮崎 猛〈委員長〉, 岩井 吉彌〈副委員長〉, 青合 幹夫, 青山 裕司, 乾 清絵, 内田 昌一, 大島 仁, 大谷 貴美子, 久保 敏隆, 中川 典子, 中山 直子, 福田 淳, 松尾 義平, 松下 正徳, 森井 保光, 山内 俊子, 山岡 茂和, 山本 玉幸, 渡辺 民 (オブザーバー委員) 田中 良泰, 平田 茂
代理出席 欠席者	(田辺 真人委員の代理者) 大住 あづさ, 川勝 正彦, 田辺 真人, 溝川 幸雄

司 会 (事務局)	(定刻により, 第2回京都市農林行政基本方針検討委員会の開 会を宣言) (今回初めて出席する委員の紹介)
事務局	○ 第1回検討委員会における意見の確認(摘録確認) ○ 基本方針の視点の追加についての説明 ・ 8つ目の視点として, 「教育と食・農林との連携」を追加。 ・ 視点「観光や文化等農林業の持つ多面的機能を生かした まちづくり・ひとづくりの推進」を, 広く限界集落も含む まちづくりであることを明確にするために, 「観光や文化 等農林業の持つ多面的機能を生かした <u>地域づくり・人づく りの推進</u> 」に言葉を変更。 ○ 各視点の検討について説明。
委員長	摘録の内容について質問はありませんか。
全委員	(特になし)
委員長	策定の視点①～⑧の8本の柱立てについて, 何かご意見はあ りませんか。

委員 X	<p>○ 都市農地の位置付けを「観光や文化農林業の持つ多面的機能を生かしたまちづくり・人づくりの推進」の中に入れて農地保全の意味合いが弱くなるのではないか。「観光・文化」と農地を残すことは、別問題だと思う。</p>
事務局	<p>○ 都市農業を観光と結びつけるという意味合いではない。多面的機能を生かした部分の中で都市農地の保全を入れていきたい。多面的機能の中に広く「農地の保全」も含まれるということで理解していただきたい。</p>
委員長	<p>他にありますか。</p>
全委員	<p>(特になし)</p>
委員長	<p>それでは事務局の方から本日の議題について、一括して説明願います。</p>
事務局	<p>(資料により説明)</p>
委員長	<p>○ 本日の議題であります「各視点についての検討」①～④までの4つ検討項目については、それぞれが絡み合っているので一括で意見を頂きたいと思えます。</p> <p>○ 少なくとも農業の現場で元気な活動を行っている地域にはほぼ共通した3つの特徴がある。①都市農村交流活動を行っている。②環境保全型農業に力を入れて頑張っている。③多面的機能についての活動を住民みんなで行っている。こういった活動ができている地域は比較的高い値段で消費者が買ってくれるブランド化ができている。</p> <p>○ オブザーバー、代理委員も積極的な発言をお願いします。</p>
委員 C	<p>○ 大原では、株式会社を設立して都市農村交流を図っている。構成する各部門の理念としては、株式会社の総合理念「世界に誇れる観光農村を目指す」、旬菜市場理念「自然が育んだ元気野菜で地産地消を推進する」、もちの館・花むらさき理念「大原らしい食材で安心・安全な食を提供する」、交流イベント理念「地域文化の交流とてなしの場の創造」、農業事業理念「環</p>

<p>(委員C)</p>	<p>境に配慮した農業を推進する」となっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 出荷者は、作ったものが、売れる喜びがある。出荷量は増加しているが、有機野菜については、安い値段で販売していない。 ○ 朝市による都市と農村の交流、市民を対象とした体験農園を実施している。 ○ CSA（※1末尾参照）の考え方を参考に、消費者の方と生産者が事前に提携してお金を頂き、後で生産物を提供する取組を行っている。このような取組が、今後野菜や米の販路を広げる手法になり得ると考えている。
<p>委員A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 私の家では、父が専業農家で市場出荷をしていたが、高齢になり規模を縮小していたが、近くに直売所が出て出荷するようになった。 ○ 市場は、せり売りのため価格が不安定である。その点直売所は、年中同じ単価で値段的にも良い。値段を見ながら作付計画を考えることができる。 ○ 生産者にとっては、安定した販路と収入が必要である。安定収入が確保できれば農業はできる。 ○ 学校給食への販売も工夫によっては出来るのではないかと（画一規格の廃止など教育委員会との連携も必要）
<p>委員R</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校給食では、平等性と安全性が優先される。「みんなが同じものを食べないとダメ。」「安全性の確認ができないとダメ。（＝市場出荷のものでないとダメ）」と言った考え方を改めないといけない。教育委員会の体質を変えなければならない。 ○ 直売所では、農産物の供給体制が重要である。お昼頃に行くと何もない、せっかく行ったのに物が無いでは、お客さまは失望する。 ○ 消費者はおいしいものを求める。おいしいものを作ればブランドの確立にもなる。
<p>副委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 私は、朝市で買うこともあるし、家庭菜園もしているが、最近食の安全について疑問を持っている。すなわち、地元のもの、顔が見えるものなら安全だろうか。市場経由のもの、外国のものなどは抜き取り検査等もするのでこちらのほうがむしろ安全ではないか。実態はどうなのか。

<p>委員U</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 市場では抽出検査をしているが、100%安全ではない。しかし、確率からしたら安全である。 ○ 地域という概念を持つことは大切だと思う。地域として皆で何がしたいか考えることが必要。 ○ 地域の活性化を考えると、朝市に買いに行ったら商品がなかった、というのは、これはこれでよいと思う。 ○ 都市近郊農家を見ると、専業ではむつかしいと思う。日本は兼業農家が大切であり、兼業農家をいかに育てるかが大切だ。年に8回休めば兼業でコメは作れる。 ○ ブランド京野菜は、年間20億円くらいの売り上げだが、全体からみればほんのわずかだ。 ○ 地産地消でやった方がよいと思う。
<p>委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 担い手対策は兼業農家対策がより重要ということで、いわゆる半農半X（はんのうはんエックス、※2）農家を増やしてどのように農村を守っていくのか、という御意見だと思う。 ○ 地産地消の安全性の話が出たが、御意見のある方いらっしゃいますか。
<p>委員C</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ スーパーのように、たっぷり商品が常に揃っている、ということはない。安全性を求めながら、同じ規格・品質のものを沢山求める消費者に応える必要があるのか、と思っている。量が少ないから省農薬、低化学肥料栽培が出来る。安全性をとるなら、量が確保出来なくても仕方ない。 ○ 消費者には「安かろう、美味しかろう、でも安全」という御都合主義をやめていただきたい。 ○ トレサビリティはしていないが、レシピ等を付けて工夫している。
<p>委員F</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 京都府では、直売所のグループに対してトレサビリティの研究、加工品表示の勉強会等を行っている。 ○ 安全性を確認するためにも栽培履歴、農家日誌等記帳することが自分達（農家自身）を守ることになる。 ○ 地域のファン作りをするためにも、大原なら赤じそ、京北なら納豆餅、というように、地域における1つの「売り」が大切。 ○ X委員の言っておられた都市農地の保全についての思いを反映させるため、策定の視点の③「地産地消の推進」の頭に、

(委員F)	「都市農地の保全による」という文言を加えて、「都市農地の保全, 地産地消の推進」とすることはできないでしょうか。
委員R	○ 朝市の売り切れの件だが, 店頭で野菜がある時間を何時から何時というように消費者に対してきちんとお知らせすればよい。
委員長	大原朝市は売り切れが多いのですか。
委員C	○ 昨年度(前半)は多かったが, 今年は作付けが増えたため減ってきた。
委員M	<p>○ 働く主婦は, 朝市へ行く機会がないのではないかと。また, レシピはあるが, 材料が入手しにくい場合もある。</p> <p>○ 地域には, 色々な言われや物語が埋もれている。それらを生かしながら農と林をつなげることができないか。例えば花背では, フキノトウのとうようかんを作っている。高齢化が進む中でこのような伝統的なお菓子が作られなくなっていく。5年~10年後知る人がいなくなっていく。</p> <p>○ 京都限定菓子として農と企業がタイアップしていくなど, 農・林・商(企業)を連携させたモノを考え, アイディアを出していくことが必要である。</p>
委員U	<p>○ 京野菜の食べ方はいろいろな料理教室で実施している。</p> <p>○ 竹はいいものだが, 一般の方や農林水産省の関心は薄い。京都市の竹林公園をもっと活用すべきだし, 竹をアピールして大切にすることが必要である。</p>
委員D	○ 京都市の農林業(第1回目委員会配布資料)の7ページにある森林ハイキングとはどのようなものですか。また広報はどのようにされていますか。
事務局	○ 花背にある山村都市交流の森で行っているイベントとして都市住民を対象に実施しており, 月1~2回(1回20~30名参加)山の散策を楽しんでもらっています。また広報は, 市民新聞, 交流の森のホームページで行っております。

委員D	<ul style="list-style-type: none"> ○ 林業に関するボランティアを募って、そういったイベントを運営してはどうか。 ○ モデルフォレストのパンフレットの2ページにある「カブト（虫）の森」とはどこにあるのか。 ○ 自然を愛する子供を育てるためにも、虫のいる山づくりをしてほしい。
委員J	<ul style="list-style-type: none"> ○ カブトの森は具体的な森ではなく、一般的なものを指します。 ○ 現在モデルフォレスト運動は全国20箇所で開催中。資金、人の協力などをしていただいている。今後、広めて生きたい。
委員L	<ul style="list-style-type: none"> ○ 東山の国有林で、市民参加の森づくりを進めてもらっている。 ○ 企業は、あくまでもサポーターであり、地元が主役になってもらうことが望ましい。
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ○ 具体的にどのように企業、ボランティア（市民参加）の協力を求めるのか。
委員Y	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各企業は「環境」に力を入れている。「京都市」の森林がフィールドになると、環境配慮型の企業が、イメージアップを狙って飛びついてくるのではないか。 ○ 京都市の山村地域では、高齢化が進んでおり、ある程度行政がコーディネータとして入って、地域おこしに取り組む必要がある。また行政も、農林だけでなく、福祉、商工などすべてが関わるのが良い。 ○ 近年、建売の家で床の間のない家が多く、北山杉を使った床柱の利用が激変している。北山杉が売れなくて大変困っている。室町時代からの芸術品を生かしていくことを考えなければならぬ。売り方の工夫が必要だ。
委員O	<ul style="list-style-type: none"> ○ 京都市には、市街化区域と市街化調整区域があり、市街化区域では、農地は生産緑地として守られている。都市計画局としては、今まで生産緑地に農業用基盤の整備をしていることもあり、その維持についても大切なことだと認識している。 ○ 調整区域では開発を抑制しているが、大原では地域計画によ

<p>(委員0)</p>	<p>る街づくりも考えられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 山には風致地区を指定して森やその周辺の環境を守っている。今までは「寄るな触るな」の守り方だったが、今後は「寄ってもらって触ってもらいながら、市民に親しめる森づくり」に向けた動きをしている。 ○ 供給量・品質と価格に問題があると思うが、できるだけ市内の木材を使った家づくりを進めていければ良いと思う。
<p>委員B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 林業という産業への自信を、生徒に持たせることが大切である。木を使うコンクールや、作品、作文、意見発表会等、評価してもらえる場所や催し（全国大会、世界大会）を作ってもらいたい。生徒達は、自分達で作った作品が評価されることによって、自信を持てるようになる。 ○ 高校生が全国大会で発表して自信を持つように、産業にも自信を持たせることが大切。専業で自信が持てないと、産業として育たない。林業は、専業でできるような産業にならないと後継者は育たないと思う。 ○ いま山を持っている大地主でも「林業なんかやってもダメ」ということで後継者に林業をやらせているところは少ない。親の意識を変えることも大切。卒業生でも林業に就くのは、3年に1人ぐらいである。しかし最近では、地域の後継者として「日曜林家」というような、週末に実家に戻ってきて集落の山の作業をする卒業生も出てきている。 ○ 京都市と合併して感じることは、農林行政と都市計画行政の縦割りを強く感じる。木材の需要促進・消費拡大をうたいながら、片方では木をどんどん木を使いにくくするような規制をかけている。木の需要拡大を言うならば、行政がそのことに取り組みやすいように、縦割りでなく、総合的に考えて欲しい。
<p>副委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 山間部の農林業の活性化は世界的な課題。平場の林業は儲かっている（ニュージーランド、アルゼンチン、チリ、南アフリカ）。世界的に見て、日本はモンスーン気候のため、草が多く林業がしにくい。 ○ 従来の林業をやるだけではダメである。例えば加工製品にして販売の喜びを得られるものや、住宅販売までやって、収入を得られることをしないといけない。 ○ 地域活性化が上手くいく1つのポイントとして、次のような

(副委員長)	特徴を持ったリーダーの存在が挙げられる。つまり、複数名（５～６名）いて、地元のことをよく分かっており（地元出身）、一度地元から出た経験がある（外部の視線で見ることができる）ような人の存在である。
委員 X	<ul style="list-style-type: none"> ○ ３０～４０代の担い手農家には、安定した販路が必要である。市として販売所など出来ないか。 ○ F 委員の案を取り入れて、地産地消と都市農業を絡めてもらえると個人的には助かる。 ○ 市街化区域の農地は、都市計画の見直しで今後規制の強化を受ける方向にあるのか。
委員 O	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今後、規制を強化する方向にはない。生産緑地の面積は買取請求が出され農地は、減少傾向にある。 ○ 公共建築部分ではできるだけ市内産材を使っていこうと考えている。 ○ 市長の判断で今年度、京北に木材のペレットを作る工場を造ることとなった。この木材ペレットを使うストーブを少なくとも公共施設で使うということになっている。
委員 T	<ul style="list-style-type: none"> ○ 健全で節度ある農業・林業は、地球にやさしい。 ○ 農業・林業はビジネスとして成立できるよう、ビジネスモデルの確立が大切。 ○ CO₂の吸収源としての森は、大切な資源である。 ○ 行政としてもやる気のある方、地域に熱意のある方に対して協力をしていきたい。 ○ 日本は、地球温暖化対策におけるCO₂削減目標６％の非常に大きな部分を、森林吸収でカウントしようとしている。その意味でも農業・林業への支援は大事だ。
委員 E	<ul style="list-style-type: none"> ○ 正式に就農するというだけでなく、単に農家で働きたい、というような人へのサポートがないような気がする。 農業に触れれば興味を持つ人も多いと思うので、どのようにしてこのような人達を引き込むのかの工夫が必要。 ○ 農商工連携すれば、色々な人が来てくれるのでは。
委員 M	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新規就農者には、研修制度があります。農業大学校などもある。トラクター等個人的なものにも補助を行う制度もありま

(委員M)	す。
委員G	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現在京都市では、市の基本計画の策定に取りかかろうとしている。また産業観光局では、今回の農林行政基本方針の他、産業振興ビジョン、観光ビジョンといった新計画の策定に取り組んでいるが、農林業との連携・整合性を念頭に置いてこれらの計画に取り組んでいきたいと考えている。 ○ どのような産業でも、まず所得をいかにして確保するか、生活ができる水準にどのようにして持っていくか、どのようなプラスアルファを見いだすか、を考えなければならない。 ○ 農林の付加価値のつけ方は難しいが、農商工連携などの手法によって新たな方策を見出す余地もまだまだあると思う。また、供給サイドの視点からだけで考えるのではなく、消費者の視点に立った方策も大切である。
委員K	<ul style="list-style-type: none"> ○ 京都市花き振興協会の代表をしている。協会は、生産・流通・販売の3つの団体で構成されており、花の啓発事業として実施している「花と緑の市民フェア」は、40年の歴史を持つ。フェアと一緒にやっている品評会や、花の販売などを通じて、どのようなものが売れるのか、生産者にとっても大変勉強になっている。 ○ 西京区大原野では、花き生産団体（9名のうち6名新規就農）があり、10年が経過している。 10年経って感じる課題としては、従来から農業をしている人とサラリーマンから農業に就いた人との間で、考え方が合わない部分があることや、新規就農の場合は、ある程度最初の時点で資金の余裕がある人でないとしんどい、ということである。
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先程、策定の視点の③の「地産地消の推進」の頭に、「都市農地の保全による」という文言を加えて、「都市農地の保全による地産地消の推進」とすることはできないか、という話があったが、「都市農地」とは、市街化区域の農地だけを指すのか、又は京都市全域の農地を指すのか、発言された委員の考えはいかがですか。
委員X	<ul style="list-style-type: none"> ○ 都市農地は、市街化区域内の農地という認識である。都市近郊農地とは異なる。

委員 F	○ 当初の思いは都市内の市街化区域だったが、色々と議論を聞いていると、京都市内の農地，ということに落ち着くのかなという感じがします。判断が難しいです。
委員長	視点③への文言追加の件と共に，事務局に検討してもらう，ということをお願いします。
委員 N	<ul style="list-style-type: none"> ○ 未来的な思考をすることが大切である。 ○ 京都フォレストは，優良企業が多い。 ○ 京都産の木材を使用したら（＝地産地消に貢献したら）ポイントがつくようなシステムを作ってはどうか。 ○ 里山が京都にはない。多面的機能と関連して，木についての教育を行ったり，里山の復活を目指してほしい。 ○ 産官学の連携は大切である。
委員 R	○ 小豆（京都大納言）では，機械化の推進をされている。また長岡京では，たけのこの冷凍技術の試験をしている。このような付加価値の付け方を検討する必要がある。
委員長	<p>本日の取りまとめとして次のように整理させていただきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 農林業の担い手について，農業については半農半X（※2）という考え方の位置づけが必要になってくるのではないか。林業については多角的な林業の経営によって担い手を確保していく位置付けも重要ではないか。 ○ 収入の確保については，「都市農村交流」「環境保全型農業」「多面的機能」の三位一体的な取組の中で地域づくりを行い，地域のファンを育成することによって収入を確保できるような展開が大切である。 ○ 教育機関との連携が必要である。農林業の現場体験を必須化していくことが必要なのでは。 ○ 観光資源につながるような多面的機能の発揮が重要になってくる。 ○ 京都の農林資源の総合的な地産地消を確立してゆけないか。 ○ 中山間地域の地域おこしに当たっては，地域コーディネータの育成が重要である。 ○ モデルフォレスト活動も含めた市民と作る農林業について

<p>(委員長)</p> <p>委員長</p>	<p>は、企業のCSR志向が大分弱まってきている中で、企業中心の取組方向で行くのか、市民ボランティア中心なのか、教育による参加なのか、3つのうちどの方向で進むか検討が必要である。</p> <p>○ モデルフォレストについては、もっと広い範囲の川下の取組を含めた企業参加活動にならないか、検討や提案が必要である。</p> <p>(終了あいさつ)</p> <p>本日は各論に入り、農林業を振興するための様々な貴重な御意見をいただきました。直ぐ実施すべきものから、振興策のヒントになるものまであったと思います。本日出た意見を基に基本方針のたたき台を作成し、再度検討会でよりよきものに仕上げたいと思いますので、事務局に作業をお願いいたします。これで進行を司会にお返しします。</p> <p>(以上)</p>
-------------------------	---

(※1) CSA : Community Supported Agriculture の略。地域社会で支える農業の意。

(※2) 半農半^{エックス}X : 農業を取り入れた暮らしをしながら、自分自身の職業や好きなことをする生活のこと。Xの部分には何が入っても良い(例えば「年金」等)。「半」という漢字を使用しているが、必ずしも50%という意味ではない。

(※3) CSR : Corporate Social Responsibility の略。企業の社会的責任のこと。